

ふうりん 風鈴

日本の夏の風物詩として根付いているものの一つに風鈴が挙げられます。風鈴とは、家の軒下などに吊り下げて用いられる小型の鈴のことで、風によって音が鳴る仕組みになっています。その軽やかな音は一般的に涼しげな音と表現され、冷房のなかった時代に、むしむしとした夏の暑苦しさを和らげるために、日本人は風鈴の音に涼しの風情を感じてきました。

風鈴の構造は、金属またはガラスなどで作られたお椀型をした外身と、内側に紐で吊り下げられた舌と呼ばれる小さな部品からなります。風をよく受けるように、紐の先端に短冊をつけることがあります。短冊が風を受けて舌を揺らし、舌が外身に当たって繊細でやさしい音色を奏でます。短冊の揺れによって、目に見えない風を見ることができ、涼をとる効果があります。風鈴の起源は、古く中国の唐の時代まで遡ると言われています。当時の中国には、占風鐸という占いがあり、竹林の四方に風鐸という青銅でできた鐘のようなものを吊るし、風の向きや音の鳴り方で物事の吉凶を占うものでした。その風鐸は仏教とともに日本に伝わったとされています。当時の日本では、強い風は流行病や災いを運んでくると考えられていました。風鐸は、その音が聞こえる範囲は聖域とされ、災いから守ってくれるものとして、お寺の軒の四隅に吊るされていました。風鈴という呼び名が使用されるようになったのは平安時代で、貴族が魔除けとして軒先に吊るしていたそうです。江戸時代中期になると、オランダ経由でガラスの製法が伝わった後、ガラス製の風鈴が主流になり、音を楽しむ道具として定着してきました。

風鈴には、江戸風鈴や南部風鈴、伊万里焼風鈴など多くの種類があります。江戸風鈴は、江戸時代からの技法を受け継いだ手作りのガラス風鈴で、チリンチリンと短い音がします。ガラスを吹いて本体を膨らませるところから絵付けまで、全ての工程が職人の手作業で行われるため、音色も絵柄も微妙に異なります。南部風鈴

は、^{いわてけんもりおか}岩手県^{てんとうこうげいひん}盛岡の^{なんぶてつき}伝統工芸品^{せいさく}である^{たか}南部鉄器^すで製作された^な風鈴^{かんきょうしょう}で、^{せんてい}高く澄んだ音^{のこ}が^{おとふうけいひやくせん}鳴ります。^{えら}環境省^{さいたまけん}が^{かわごえひかわじんじゃ}選定した「^{なつげんてい}残したい日本の音風景^{えん}百選^{ふうりん}」にも選ばれていま^{まいとしかいさい}す。^{けいだい}日本各地に、^{かぎ}風鈴祭り^こや^{いろあざ}風鈴市^{いっせい}も数多くあります。^{すず}埼玉県の^{ねいろ}川越氷川神社^{かな}では、^{ようす}2014年から夏限定の祭り「^{あつかん}縁むすび風鈴^{おとず}」が毎年開催されます。^{ひと}境内に飾ら^{たんざく}れるおおよそ2000個の^{ねが}色鮮やかな江戸風鈴^{ごと}が一斉に涼しげな音色^かを奏でる様子はま^{きんねん}さに^{えんがわ}圧巻^{じゅうたく}です。^ふ訪れる人は、^{たの}短冊^{かた}に願^かい事^かを書^かいて風鈴^かにかけることができます。^か近年では、^{かた}マンション^かや^か縁側^かのない住宅^かが増えるにつれ、^か風鈴^かの楽しみ方^かが変わり^かつつあります。^か金魚^かや^か朝顔^かなどの柄^かをした^かガラス製^かの風鈴^かは、^か窓辺^かに飾^かるだけで、^か季節^かを表現^かする^かインテリア^かになります。^か玄関^かに吊^かるして^かおくと、^か扉^かを開^かけた^か時^かに通^かる^か風^かで^か涼^かやかに^か鳴^かる^か風鈴^かが^か外^かの^か暑^かさを^か忘れ^かさせて^かくれます。^か音色^かと^か見た目^かの^か両方^かで^か夏^かを^か楽し^かませ^かて^かくれる^かところ^かは、^か風鈴^かの^か最大^かの^か魅力^かで、^か長^か年^か日^か本人^かに^か親^かしま^かれて^かきた^か理由^かでは^かない^かで^かしょう^かか。^か蒸^かし^か暑^かい^か夏^かに^か負^かけ^かず^かに、^か色^か鮮^かやか^かで^か盛^か大な^か風鈴^か祭^かりに^か出^かか^かけて^かみ^かたり、^か生^か活^かス^かタ^かイル^かに^かあ^かった^か風鈴^かを^か自^か宅^かに^か飾^かっ^かて^かみ^かたり^かして、^か風^か情^かあ^かる^か夏^かを^か満^か喫^かし^かたい^かもの^かです。